

ジャック・カロ画『ロレーヌの貴族』

文化女子大学非常勤講師（服装史特論担当） 徳井 淑子

17世紀のフランスを代表する版画家、ジャック・カロといえば、貧しい庶民の姿やイタリア喜劇の道化など、社会の周縁にある者たちを描いた作品で有名である。たとえば『物乞い』と題されたシリーズを思い浮かべるかもしれない。そこに描かれた哀れなひとたちには、^{れんびん}憐憫というより社会から疎外されて生きるひとたちの不気味な怪しさが漂っている。それは、エッチングの繊細・^{こうち}巧緻な技法と、造形上の独特の作風が生み出す雰囲気でもある。対象と技法と様式の不思議なギャップが妙に印象的であったというのが、筆者が初めてカロに出合ったときの印象である。

そんなカロのイメージをくつがえす作品集が、このたび図書館に所蔵されることになった『ロレーヌの貴族（La noblesse de Lorraine）』〈KH042/383.135/C〉である。ここに描かれているのは、フランス東部のロレーヌ公国に住まう上層階級の男女であり、流行の贅沢な衣装をまとい、堂々と前を見据え、あるいは軽やかに挨拶をおくっている12人の姿である。12枚セットのシリーズとして発行されたが、もともと標題紙はなく、そのためであろうか、タイトルには貴族とあるが、描かれているのはむしろブルジョア階級の男女である。正確な発行年の記録はないが、1624年の制作と推測されている。カロらしい軽妙なタッチを示しながらも当時の衣装を正確に写しとった記録であり、今日では銅版画による服装画集として最も初期の、そして以後の服装画集の方向を決定付けた最も重要な銅版画集として評価されている。

ジャック・カロ（Jacques CALLOT, 1592-1635）は、ロレーヌ公国の首都ナンシーで、ロレーヌ大公シャルルに仕える宮廷音楽隊長の息子として生まれた。母は画家を輩出した家系の出身で、彼はその血を受け継いだのだろう。貴族や芸術家の出入りする

家庭環境のなかで成長した彼は、12歳の時に画家を志してイタリアへ出発する。社会のマーギナルを描いた作品は、浮浪者やシプシーを道連れにし、冒険に満ちたこの時の旅の経験によるといわれる。

ローマの版画家テンペスタの工房で3年間の修業をした後、フィレンツェの大公コジモ2世の宮廷に仕えたカロは、後期マニエリスムの影響を受けながら20代にして独自の様式を創り上げ、名声を確立した早熟の天才である。1621年にコジモ大公が没すると、ロレーヌ大公シャルルに呼ばれ、彼は帰郷する。以後、彼の活発な制作活動が始まり、その成果の一つがこの『ロレーヌの貴族』である。カロが活躍した時代のロレーヌ公国は、フランスと神聖ローマ帝国に挟まれたこの小さな独立国が最も栄えたときである。しかしカロの亡くなる2年前の1633年、フランスによるナンシー攻略によって輝かしい時代は終焉を迎えている。

男女が6人ずつの12枚の版画はいずれも画面いっぱい人物が立ち、正面や横を向き、あるいはやや斜めにポーズをとっている。背景の下に小さく関連の情景が描かれる画面構成はカロの特徴であり、全身像と背景の組合せは、ポナール兄弟の服飾版画集など後世に受け継がれることになる。たとえば図1の背景を見てみよう。小さいけれどもその情景が意外にはっきり分かるのは、やはりカロの巧みな技による。左側に橋のかかった川が流れ、右側に立派な建造物に囲まれた広場が見える。そこには挨拶をかわしている2人の姿があるが、彼らが男であることはマントの着装からはっきりしている。おそらく画面いっぱいに描かれた男の姿はその拡大図なのである。

さてこの横向きの男性像は、6人の男のなかでもきわめて洗練された姿をもつ。長めの髪を見え隠れさせる帽子のラインから、美しいフォルムで

広がる立ち襟と、横向きのマントの落ちるラインまで、その優雅さは格別である。薔薇の花のような飾りを足の甲に付けているのはこの頃の流行である。膝下に付けた場合は靴下留めを兼ねたらしいが、17世紀前半のヨーロッパを特徴付ける風俗としてよく知られている。よく見れば、靴を履いた左足にサンダルを突っかけているのが分かるだろう。同様にこの頃の習慣で、雨後の泥道で靴が汚れないように履かれた木製の突っかけである。

6人の男性の多くがこのようなマント姿だが、マントを羽織らずその下の服装の詳細を示している作品もある。袖にスラッシュを入れた上着（ブルポワン）の様子や、上着とズボンを腰のところで結び付ける紐（エギュイエット）がこの頃に飾りとなった様子も示されている。当時の作法書で行き過ぎと非難されたたっぷりとしたズボン、あるいは大きな折返しの付いた、いわゆる鍋型ブーツもしっかり記録されている。

一方、女性の服装については、二つの型がある。一つは図2のような、これまでの服飾史で1620-40年頃の典型とされる姿の女性像である。大きく膨らんだ両袖に縦にならぶ切込み装飾、その大きな袖を割るように肘の辺りに巻かれたリボン、そし

て広いデコルテに扁平なレースの襟、場合によっては両サイドでからげたスカートという服装である。そしてもう一つの型が、16世紀の名残とも思える袖の形状に特徴のあるドレスである。小さな切込み装飾がタイヤの模様のように並んだ独特の意匠はパリの王宮では1580年頃に流行したものだが、このデザインは本来ドイツ圏に起源があるようである。16世紀初期に切込み装飾が始まった頃、クラナハの作品などに見られるからである。カコが描くこの種のファッションはパリから見れば辺境の時代遅れというのではなく、ドイツ圏に接するロレーヌ地方ゆえの特徴なのだろう。

図2の女性が付けているマスクは自らの匿名性を考慮して、女性が外出の際に少なからず使用したものである。マスクはマフとともに17世紀前半のファッションを代表するアイテムである。両手を温める毛皮製のマフは男女の冬場の装飾品である。『ロレーヌの貴族』は時代の風俗を余すことなく伝えている。

（参考服飾文献）

- ・Raymond Gaudriault, Répertoire de la gravure de mode française, Paris, 1988, pp.15-16
- ・小勝禮子他『モードと諷刺』 栃木県立美術館、1995年、58-59ページ



図1



図2